

第2回全日本民医連 心理職全国交流集会

愛媛生協病院
精神科・心療内科
今村高暢

- 民医連心理職交流会の歴史
- 災害支援
- 「ケアの倫理」について

民医連心理 職交流会の 歴史

- 民医連で働く心理職には、精神科分野、職員健康管理分野、小児科分野で働いている。非常勤職も多く、他事業所での活動など見えない部分も多かった。
- 公認心理師制度も加わり、またコロナ禍で職員健康管理分野で心理職の交流を求める声は増えていた。
- 精神科分野でも以前より交流を求める声があった。
- 2023年8月31日に第1回公認心理師・臨床心理士交流会をオンラインで開催
- その準備段階で北海道の事件のケアに関わることで心理職が関わる形となった。

- 全日本民医連第1回公認心理師・臨床心理士交流集会; 2023年8月31日
(木)14:00~17:00 オンライン
- 18 県連 47 人(公認心理師、臨床心理士)、主催者含めて 54 人の参加
- 民医連のふたつの EAP(岡山・東京)からそれぞれ“外部 EAP の取り組み”と“ストレスチェック組織分析の活用”について。また病理医でありながら公認心理師の資格も取って職員のメンタルサポートに取り組んでいる愛知・南生協病院の棚橋千里医師からも報告をいただき、ブレイクアウトセッションを行う。

- 『日頃は知ることのできない、他事業所での心理士の働き方を知ることができ、皆さんが心理士としての役割やできることを模索しながら、日々の業務に携わっていることを知り、勇気づけられた』
- 『職員のメンタルヘルスを担っていない方が、この交流会を通じてトライしてみようか葛藤している姿が印象的で、とても良い広がりを感じた』
- 『とても勉強になる時間でした。立場は違えども、悩みなどは一緒だと感じた。こういった交流会が継続されることが、心理士へのケアにもサポートにもなると実感した』
- 『一人職場なので、名簿を見て、こんなにたくさん心理士さんがいたんだ!と、エンパワメントされる気がしました』などの感想が寄せられました。
- 参加者には事前に「自己紹介シート」を提出していたが当日活用しましたが、シートにも集会を待望していた言葉が溢れていました。継続開催と日常的な情報交換を希望する声も多数ありました。

能登半島地震心理職支援

- 2024年元日の16時10分頃に発生した最大震度7の「能登半島地震」は、能登地域に居住し民医連の能登4事業所に勤務する職員はもとより、能登地域出身者の実家や家族・親族の多くが被災し、その後も避難所生活をしいられている職員や家族を金沢へ避難させている職員も多数いた。また金沢以南事業所職員も、かつてない大きな揺れ、続く余震に強い不安が募るなど、県下全域でメンタル不調を訴える職員の状況が判明した。県連対策本部では、1月11日に対策本部のもとにメンタルサポートチーム(仮称)を立ち上げ、県連内全職員のメンタル状況把握と要対応者のリストアップなどに着手。メンタルサポートの枠組み構築を急ぐこと、県連内の既存のメンタルヘルス相談システムを活用することなど確認したが、能登地域事業所を中心に要対応者・事業所も相当数にのぼることから、既存の体制や県連内精神科医師・心理職による対応だけでは困難であると判断し心理職・人的支援を依頼。

面接の目的

- 1 スクリーニングとリファー; 継続的なケアが必要な人をスクリーニングしサポートの枠組み(医療機関、内部相談窓口等)につなぐ
- 2 心理教育; 災害時の一般的な心理的反応と変遷、必要なケアについて心理教育を行う。セルフケアを支えながら、ラインケア、ピアサポートでの支えあいを促す
- 3 現場が求めるニーズをききとる
- 4 アウトリーチにて足を運ぶことで、相談しやすい環境づくりを通して、サポート希求行動を促す

心理職支援体制、支援延べ日数

■心理職支援者数:青森民医連5名、東京民医連2名、奈良民医連1名、岡山民医連2名、熊本民医連2名 合計12名

■現地での支援延べ日数:33日(オンライン面接含まず)

■面接実施数:初回面接135名、再面接55回、全面接実施数187回(うちオンライン40回)

■事業所別面接実施数:輪島診療所24名(64.9%)、羽咋診療所41名(87.2%)、城北病院37名(6.7%)その他の事業所 33名合計135名に実施。全職員1,446名の実施率9.3%。その後、WEB面接を実施、6月1日現在継続者7名。

「ケアの倫理」について

- 「ケアの倫理とは、女性たちの多くが家庭生活にまつわる営み、すなわちケアを一手に引き受けさせられてきた社会・政治状況を批判することから生まれた、人間、社会、そして政治についての考え方、判断の在り方である」
- 「ケアの倫理は、例外なくひとは他者との応答のなかで、身体的、精神的なケアを受けつつ生きている、具体的でかつ傷つけられやすい存在である事実を認め、そこから社会を構想しようと呼びかけている」から「経済力のある者が善い市民であるかのように、政治的にも発言力が高まる新自由主義と呼ばれる現在の社会状況のなかで、ひときわ重要性を増している」



全日本民医連第46回総会方針 第1章第1節(2)新型コロナ・パンデミックと「ケアの倫理」

- ・〈ケア労働の重要性と「ケアの倫理」〉
- ・コロナ禍のもとで、人びとの生命・安全・生活に直接かかわる対人的な仕事である、ケア労働の重要性が誰の目にも明らかになりました。同時に、ジェンダー差別を背景として、ケア労働の社会的地位や労働条件が極めて低い状態に置かれている問題も浮かび上がりました。
- ・そして今、ケアというとなみの倫理的な特徴が注目され、それを社会のありかたの基本に据えるべきだという考えがひろがっています。
- ・「ケアの倫理」は、人と人との関係性の倫理として、一人ひとりが人間として尊重され依存し合い、共感と信頼によって相互作用するというものです。したがって、新自由主義の競争的価値観や自己責任論とは対極にあり、それを乗り越えていく上でも大きな力になります。そして「ケアの倫理」は、いっさいの暴力や戦争を許さない、公正で平和な社会づくりにもつながっています。
- ・私たちは、こうした「ケアの倫理」について大いに学び深め、日々の仕事はもちろん、政治や社会に実践的に生かしていくことが大事です。

「ケアの倫理」の歴史的変遷



- ・「ケアの倫理」とは、アメリカの発達心理学者**キャロル・ギリガン**の著作『もうひとつの声で』(1982)(日本語版1986年川島書店、2022年風行社)にその起源がある。

- ギリガンは、認知発達理論を提唱したピアジェ、心理社会的発達理論を提唱した精神分析家のエリクソン、道徳性発達理論を提唱したコールバーグを代表とした、それまでの発達心理学において「通常の発達」とされているものが、いかに男性の心理学者によって、男性の被験者を元に作られてきたかを取り上げた。男性を基準にした成人発達モデルに従うと、女性たちの生き方は未発達に見える。
- 分離やアイデンティティといった従来の視点から見ると、女性の生き方は未熟に見えるだろう。しかし女性には男性と異なる発達、つまり他者との関係を何より重視し、他者との関係の中に自分を見出す。ギリガンが提示したケアという行為から女性の中に育まれる倫理観や関係性を見直す視点は、個の確立という近代社会の掲げる目標への限界を感じさせる現代に注目を集めている。(西2024)



「ケアの倫理」café 企画 基本方針

- 全日本民医連第46回定期総会は、「ケアの倫理」を深めることを提起しました。
- 社会保障抑制政策によって、思うようなケア実践ができない、処遇が低すぎるなどの異常が常態化しているなか、「ケアの倫理」を学び深めていくことは、ケアに自己責任論をもちこむ新自由主義に抗し、戦争・暴力に対峙する民医連の日常活動と運動を発展させることにつながります。
- 世界の人権保障の到達や憲法について学ぶことは、民医連綱領を羅針盤にした日々の活動にとってますます重要となっています。
- 「ケアの倫理」caféは、第47回定期総会(2026年2月予定)へむかう時期、「高い倫理観と変革の視点を養う職員育成」活動として、全職員が取り組む学習として提起します。私たち自身の言葉で「ケアの倫理」を語り合い、次の方針につなげましょう。
- ケアに関する物語は、職種やセクシュアリティなど様々な属性、その人の歴史や生活環境などによって多様です。それぞれの語りに耳を傾け、互いに関心を向け、誰もが個として尊重されていることが実感できる組織への変革をめざしながら、ケアに満ちた新しい社会へ、どのような政策が求められているかを語り合しましょう。